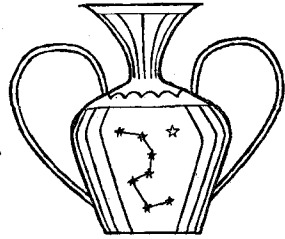


1930年

十一月の天象



太陽

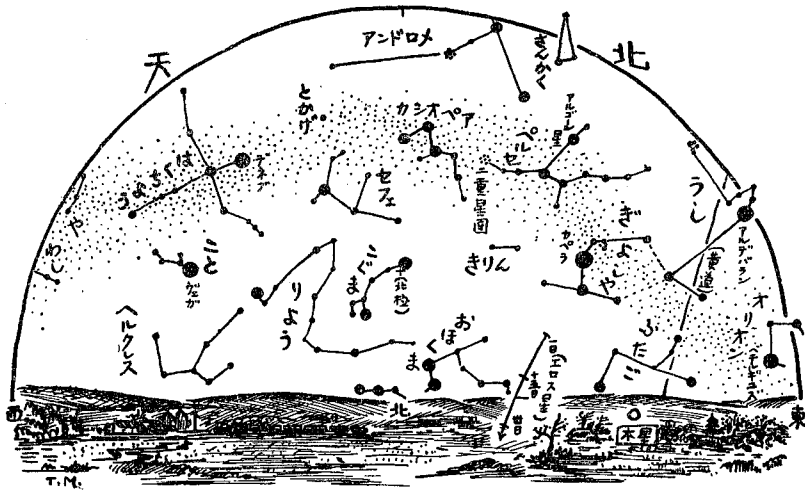
日	赤 徑	赤 緯	視直徑	星 座
1	14時23分50秒	南14度17分	32分17秒	てんびん
11	15時 3分37秒	17度18分	32分22秒	てんびん
21	15時44分49秒	19度49分	32分26秒	てんびん
(31)	16時27分22秒	21度45分	32分30秒	へびつかひ

月始めは天蝸宮にあつて、8日にその中央を通過するが、23日からは人馬宮に侵入するに至る。

月

月の相	時 刻	視直徑	星 座
満 月	6日午後 7時28分 6秒	30分51秒	ひ つ じ
下 弦	13日午後 9時27分18秒	32分15秒	し し
新 月	20日午後 7時21分12秒	31分27秒	て ん び ん
上 弦	28日午後 3時17分36秒	29分34秒	み づ が め
近地点通過	15日午後 3時30分	32分20秒	し し
遠地点通過	28日午前 7時54分	29分33秒	み づ が め

月の遊星歴訪としては、今月は先づ最初が4日午前8時に例の天王星と出合ふのから始まる。今月も今までの様に掩蔽を起す。併し、今月は月の姿さへ全然見えない時刻である。月が天王星を掩蔽するのは今後も連続して起り、明年の1月まで続く。扱て次は11日午後5時に木星と出合つて、北側を通り、13日午前2時に火星に追ひ付いて、その北側3度の所を通過し、14日午後9時に海王星の北4度の所を通る。21日午前2時には金星と出合つて、掩蔽を起すのであるが、新月であつて全然見る事が出来ない。次いで、同日午前11時に水星に追ひ付いて、その南側2度の所を通る、最後は23日夜半で土星に追ひ付いて、其れの南側5度も離れた所を通過して今月の遊星歴訪を終る。

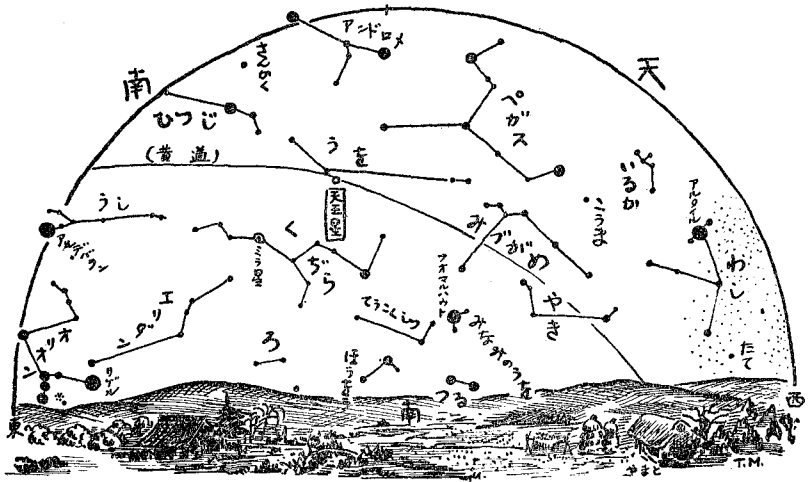


恒 星 界

紅葉が赤く山野を覆ふと、夏の星座は既に没して、東天には、も早や冬の星座がお揃ひで、顔を出し始めてゐる。中でも、彼の大星雲で有名な「オリオン」の勇姿を見ると、もう、冬が愈々迫つたなと感じられる。

北斗は低いが、此れに代つて、「カシオペア」の β 星と、「アンドロメ」の α 星とが、北極星を指示してゐる。其の周囲には、「ベガス」、「はくちよう」、「ペルセ」、「セフェ」等の星座が居並ぶ。秋の名残りの牽牛星や、織女星は、既に西の空に影淡はく、東天の「ぎよしや」や「ふたご」に後を譲つて、山端へ急ぐ。「みなみう」の主星フォomalホウトを除いては、南天は一體に淋しい。けれども、「つる」、「ほうをう」、「ちようこくしつ」、「ろ」等の星座が、遙かな南方に見え、「やぎ」が没するにつれて、「エリダン」が次第に高く登つて来る。

今後は、黄道光が次第に其の光輝を増して、宵の西空に壯麗な、乳白色の光帯を現はす頃となつた。黄道光が消える頃、東には木星が、例の一家族を引連れて登場して来る。小型望遠鏡でも見える、四個の衛星の、絶え間ない運動に、興づるのもよからう。



遊 星 界

- 水星** 月始めは暁の東天で、7日に太陽と外合の後、宵の西天に廻る。徐々に順行してゐる爲め、常に太陽に近く殆んど観望出来ぬ。が月末は稍々よい。月末の位置は「へびつかひ」の東部で、視直径5秒、光度負半等級
- 金星** 宵の明星であるが、2日の停留以後、逆行となり、ぐんぐん太陽に近付き、22日には内合となり、暁の空へ廻る。故に月初めのみ観望に適す。月初めの位置は「さそり」西部。光度負4等。視直径50秒餘り。
- 火星** 夜11時頃出現。次第に地球に接近するので視直径も大きくなり、月末には10秒足らずとなる。位置は「かに」座の中央から、同座東端まで順行する。光度正半等級。明年2月に最接近であるが、もうそろそろ観望を始めるのも面白からう。
- 木星** 午後9時頃東に登る。「かに」座東部で、8日に停留となり、以後逆行に移る。光度負2等。視直径41秒。愈々観望には都合よくなる。
- 土星** 宵の西空「いて」の中央、光度正半等、視直径14秒。
- 天王星** 宵に東天にあり。視直径3秒半、光度6等。位置は「う」を「り」の中央。
- 海王星** レグルスに近い。夜半出現 光度8等、視直径2秒餘り。
- プルート** 「ふたご」座のδ東 $3\frac{1}{2}^{\circ}$ の所で逆行を始む。